47　文法の自律性

人間の文法知識には，音声と意味に関する知識に加え，**統辞構造**（**syntactic structure**）に関する知識も含まれる。例えば，英語の文法を獲得している話者は，separateという単語とseparationという単語では強勢の位置が変化することを知識として持っている。また，walkやrunなどの動詞の意味を知っており，両者の意味の違いも知っている。そして，英語の統辞構造に関する知識は，例えば，以下のような例文を考えてみるとよく分かる。

（1）The chicken is ready to eat.

(1) の文は**多義的**（**ambiguous**）である。一つの解釈は主語のthe chickenを不定詞節の主語と同一であるとするものである。その場合の意味は「鶏は（獲物を）食べる準備ができている」となる。もう一つの解釈は，主語のthe chickenは不定詞節の動詞eatの目的語に対応し，不定詞節の主語は一般的な人を表しているとする解釈である。その場合の意味は「鶏はもう食べられる準備ができている」となる。英語話者は (1) の文にはこのような多義的な解釈があることを知っているが，それは統辞構造に関する知識を持っているからである。

我々人間は，文が表す音を聞き，その意味を理解するのであるが，音と意味は直接結びついているのではなく，統辞構造が仲介役となってその両者を結び付けている。音声，意味，統辞構造という3つは互いに（関連しつつも）独立した部門を構成していると考えられている。中でも，意味と文法（「文法」という用語はここでは統辞構造を指すものとする）が互いに独立しているということを示す有名な例が存在する。Chomsky (1957) が指摘した以下の例文を考えてみよう。

（2）a. Colorless green ideas sleep furiously.

　　b. Furiously sleep ideas green colorless.　　（Chomsky 1957: 15）

例文 (2a, b) は共に英文としてはナンセンスである。まず，例文 (2a) は日本語にすれば「色のない緑の観念が猛然と眠る」となる。しかし，colorlessとgreenという2つの形容詞が表している概念がそもそも矛盾し，色と抽象名詞であるideasの組み合わせも不適合であり，さらにそれがsleepという行為をfuriouslyに行うというあり得ない意味内容を表している。したがって，例文 (2a) はナンセンスである。（もちろん，(2a) のような文に対して何らかの詩的な解釈や比喩などの手段による解釈を与えることは可能かもしれないが，これらは全く次元の異なる話である）。同じように，例文 (2b) もナンセンスであり，英文としては認められない。しかし，もうすでにお気づきであろうが，ここには重要な事実がある。それ

は，例文（2a, b）はどちらもナンセンスな文であることには変わりはないが，例文（2a）は文法的な文であるということである。つまり，意味論的にはおかしな文であることは確かだが，例文（2a）は形容詞によって修飾された名詞と自動詞と副詞から構成されており，文法的には全く間違いがないのである。一方，（2b）は，（2a）と同様に意味論的におかしな文であることに加え，文法的にも誤りである。例文（2b）は英語の文法規則に一切従っておらず，ただ単に一つ一つの単語を無造作に並べているに過ぎない。これらの例文から分かることは，意味と文法（統辞構造）は互いに独立しており，両者は切り離して考えるべきであるということである。意味と文法（統辞構造）が互いに独立したものであることを示すために，

Chomsky（1957: 15）はさらに以下のような例文を挙げている。

（3）a. have you a book on modern music?
（あなたは近代音楽に関する本を持っていますか）
b. the book seems interesting.
（その本は面白そうだ）

（4）a. read you a book on modern music?
b. the child seems sleeping.

例文（3a, b）は文法的であるが，例文（4a, b）は非文法的である。例文（4a）は「近代音楽に関する本を読みますか」という意味を表している文であることは容易に理解できるが，文法的には誤りである。全く同じように，例文（4b）は「その子供は眠っているように思われる」という意味を表している文であることは容易に理解できるが，文法的には誤りである。Chomsky（1957）が指摘するように，例文（4a, b）よりも例文（3a, b）を選ぶ意味論的理由は全く存在しない。これらの例が示しているのは，意味論的にはいくら妥当に思われるものでも，文法的には正しくない文が存在するということである。まとめると，意味論的にはおかしな文であっても文法的な文が存在し，また逆に，意味論的には妥当なように思われる文であっても文法的に正しくない文が存在するということである。これらの事実を考慮すれば，文法（統辞構造）が意味から独立しているという**文法の自律性**（**autonomy of syntax**）は妥当であるように思われる。

（永盛　貴一）